

清潔観の違い：ヨーロッパと日本

著者	森 明子
雑誌名	洗濯の科学：生活環境の文化誌
巻	37
号	3
ページ	9-15
発行年	1992-08-20
URL	http://hdl.handle.net/10502/00005883

清潔観の違い

—ヨーロッパと日本—

日本とオーストリアの農村で、家族史や社会変化に関する長期的な調査研究に取り組む著者に、ヨーロッパとわが国の清潔観の違いを解説していただきました。

清潔観の違い

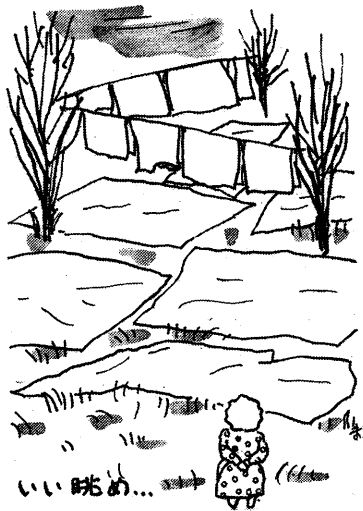
国立民族学博物館

森明子

■はじめに

私たち日本人の清潔観の中心には、水で流して汚れを去らせるという考え方があり、その代表例がミソギであるが、宗教的な行為に限られるわけではない。

日常の清潔を保つ行為である洗濯、台所仕事、入浴の場合でも、私たちにあって重要なのは、水で流す行為である。しかし、ヨーロッパ人の清潔には、水で流すことよりも、汚れをこすり落とすほうに重要性があるように見える。このことは、ヨーロッパ人の洗い方



にもあらわれていて、水はこすり落とされた汚れを受けとめるためである。私たちにしても水は汚れを運ぶ媒体であるが、私たちは留まっている水を好まない。しっかりと汚れを受けとめるためには留まっている水のほうが合理的であるはずだが、実際には流すことを好む。それは、ヨゴレやケガレが、水で流すことによって帳消しにされるという意識が働いているためだろう。

それでは、私たちは洗うことによってどのくらいの汚れが落とされることを期待しているのだろうか。そう考えると、私たちの洗う行為もかなりあやふやなものに思えてくる。ここでは、ヨーロッパの洗濯と掃除を取り上げて、このような清潔観の一端を見直してみたい。

■洗濯にあらわれた違い

洗濯水の温度と洗濯する頻度、洗濯後の仕上げにヨーロッパと日本の洗濯の違いが表われている。

□湯を沸かして洗う洗濯機

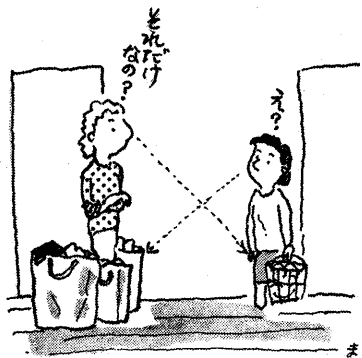
私の洗濯体験から始めよう。ヨーロッパの洗濯機は、日本のものよりも大がかりで複雑

にできている。洗濯機には遠心式の脱水機は付属していない。洗濯したものは別の脱水機を使つてから乾燥機にかける。それなのにヨーロッパの洗濯機が日本のよりはるかにこついののは、洗濯機が湯沸かしの機能を備えた構造をしているからである。ヨーロッパの人々は洗濯に必ず温水を使い、水で洗濯できるとは考えていない。温度は3段階ほどの中から選ぶのだが、その決め方にも、ヨーロッパの人々の洗濯に対する考え方が表われている。綿や麻のためには100℃に近い熱湯、ウール用にはぬるめの湯を選ぶ。温度を決定するのは繊維の材質であつて、汚れの種類ではない。そして、繊維が許す限りできるだけ高い温度を選ぶ。そうすると、麻のふきんと綿の下着が同じ洗濯槽の中でぐるぐるとまわることになる。ただし、色物と白い物の区別はしなくてはならない。色物を区別することなどはとうに忘れていたが、色落ちは高温のためだろう。

□洗濯物はためてから洗うもの

洗濯機は湯をわかしながら洗うので、いけど仕掛けてから洗いがかるまでにかかる時間は非常に長い。「たかが洗濯のために」という気持ちが起こる。この発想がヨーロッパの

人々は違うのである。洗濯はりっぱな仕事なのであつて「今日は洗濯をしよう」という意識込みでこれにのぞむ。学生寮での洗濯風景を見ると、大きなショッピングバックにぎゅうぎゅうと押し込んだ洗濯物が3、4袋もためてあつて、それをくだんの分類法にしたがつて2、3の洗濯機を同時に回転させながら



洗う。1人で生活していた私の洗濯物はわずかである。下着やブラウスなどは洗面台で手洗いし、タオルやシャツだけ洗濯機を使おうとしたのだが、それでもふつうの1台分の半分にも満たない。「不経済だから頭を使え」といわれたが、洗濯機のために洗濯物をため

る気は起こらなかつた。

私たち日本人にとつて、洗濯とは毎日こまめに残り湯などで洗うもので、汚れを繊維の上に長い間放置しておくことは不潔に思える。汚れはすぐに流して去らせた、という欲求である。この清潔観から、洗濯物を山のよう

にためておくのは怠け者とされた。平岩弓枝に「意地悪」という短編があるが、それは庭の洗濯物の情景描写から始まっている。

木から木へ庭のたたずまいをぶちこわしに張りめぐらされたビニールの綱に、よくもまあこれだけためられたと思われるほどの洗濯物が、ところせましとぶら下がつて雨を浴びている。これを見ているのは姑で、洗濯をしたのは嫁である。姑は「何日洗濯をしなかつたかが一目瞭然」と、嫁の洗濯に舌打ちする。

ところがヨーロッパでは、よい主婦は1週間にはちどだけ洗濯をする。テレビでもおなじみのワイルターの『大きな森の小さな家』(テレビドラマでは「大草原の小さな家」)で、ローラのお母さんの仕事は曜日によつて次のように割り当てられている。

月曜日は洗濯

火曜日はアイロンかけ

水曜日はつくりもの

木曜日はバターづくり

金曜日は掃除

土曜日はオーブンを使つて

日曜日は休息の日

アメリカの開拓当時の生活描写だが、ヨーロッパの家族生活と共通している。このスケジュールだと、日本人には働き者のお母さんの姿は想像できない。わが国では、洗濯もアイロンも掃除も毎日やるものだと思つている。汚れ物を1週間もためていちどに洗濯する、ほこりをためて掃除の回数を減らそう、というのは横着者でしかない。

ヨーロッパで洗濯を毎日しないのは、先進的、近代的な生活の所産というわけでは決していない。ヨーロッパでは、シャツやシーツ類の日常的な衣類は、本来ほとんどリネンで、沸騰した湯の中で洗つた。リネンの生地はごわつくから、何度も熱をくぐつてやつと肌になじむようになる。丈夫な繊維はめつたに傷むことはなく、親から子へと受け継がれる財産だった。

清潔観の違ひ

月曜日に洗濯することは、ヨーロッパの人の生活のリズムにもなつてゐる。日曜日は、日常の仕事着を着替えて教会に行く日である。朝食前に牛や豚の世話をする農家では、仕事をしたあとに身体と髪を洗つて髪や身体にしみついた家畜小屋の臭いを落とし、晴れ着に着替えて教会に行く。身体を洗うのは週

今日は洗濯も掃除もなし!



に1〜2度で、日曜日は汚れた服を着替える機会でもあるのだ。したがつて、月曜日にこの洗濯物を洗うのである。また日曜日には、外に出て働いている子供たちが家にもどり、人が集まる機会でもあるから、洗濯物もふえ。それを月曜日にいっきに洗う。

□ヨーロッパの入浴

風呂についても付言すると、浴場が家につくられるようになったのは、農村ではごく最近である。それまでは、大きなたらいを台所や寝室の床などに置いて湯を入れ、石鹸を使つて身体の汚れを湯に溶かし出したのである。洗い場はないから湯を浴びることもない。ヨーロッパの入浴方法が、浴槽の中で泡をたてて身体の汚れを湯に溶かし出す方法をとつてゐるのは、風呂場を持つ以前の身体を洗うスタイルを表わしているように思える。日本人の風呂好きは有名だが、私たちは、汚れを落とすために浴槽を使うことはない。汚れを落とすためには、洗い場で水を流すのである。風呂にはいるのは湯につかるのが好きだから、ヨーロッパ人が汚れを落とすために湯につかるのとは目的が違う。

□洗濯は大仕事

洗濯機のない時代、なべて湯をわかし、かたくてがさばるリネンを洗うのはたいへんな作業だった。私がオーストリアの村の人に聞いたところでは、かつては、奉公人が月曜日1日かけて洗つたという。洗剤のない時代は灰を湯に入れて汚れを落とし、それから川に

もつていつてすすぐ。このような洗濯なら1日かかるのもうなずける。すすぎはともかく、湯を使うときはいちどにたくさん洗わなければ、湯を使う時間は割があわない。1週にいちどだけ湯を沸かして念入りに洗濯するのは、このような洗濯方法の伝統に根ざしているのである。

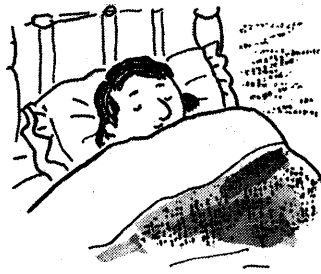
さらに昔の伝統的な洗濯は、年に2度、春と秋だけ行つたという報告もある。それは最低3日間は続いたという。汚れたシーツを蓄えておくうちに、しみをねずみがかじるといふこともあつたが、大洗濯のときに草地の上にとどこまでも広げられるリネン類の多きは、その家の豊かさをアピールした。フランスのブルゴーニュ地方の研究を行つたヴェルディエが報告して『女のフィジオロジー』(新評論)という題で翻訳も出ている。

これに比べれば日本の洗濯は手軽である。洗濯で落とすべき汚れは、泥やほこり、汗程度である。毎日入浴して毎日洗うものの汚れは、それほどこすらなくても落ちる。洗濯のときに殺菌するという発想も私たちにはない。しかし、水を使つた洗濯は、熱湯で洗濯することに慣れたヨーロッパの主婦から見ると、

耐えられないらしい。日本に住むヨーロッパの女性は、鍋で湯を沸かして洗濯機に入れて使うという。洗濯に期待しているものが違うのである。

□洗濯物の仕上げ

この期待の違いは、洗濯物の仕上げ方にも反映している。私たちが洗濯した衣類に期待



ス・ラ・月・心・の・新・鮮・な・ニ・ー・ツ・
フレッシュ

しているのは、ぱりつと乾いた繊維の感触だろう。それは、しばらくおけば湿気を含んだ空気にふれているうちに失われてしまうが、私たちは、引き出しの中の衣類を頻繁に使つて頻繁に洗う。これに対して、洗濯を私たちがより大がかりにしているヨーロッパの人々は、

仕上げに対する心遣いも私たちより念が入っている。アイロンかけにそれが表われている。シーツはもちろん、綿のTシャツ、パンツ、Gパンなどなど、洗濯した物すべてがアイロンかけの対象になる。アイロンを受けつけない繊維をやむをえず除外するにすぎない。洗濯してきちんとアイロンをかけて仕上げた洗濯物を、彼らは「フレッシュ」(新鮮、新しい)という。新しいときと同じような状態に仕上げるのが前提とされているのである。シーツや枕カバーなどのリネンは、長持ちのような衣装箱にぎつしりと詰め込んであるが、これが財産だから、めつたに使わないものも多い。それでも「フレッシュ」である。いつ洗濯されたかわからないものを「フレッシュ」と呼ぶ感覚は、私にはなかつたが、いちどだけ、田舎の民宿でシーツを2か月ぶりに替えてもらったときは、さすがに「フレッシュ」を実感した。宿の主婦がちよつと忘れていたので、これが日常というわけではなかつたそうだが、水で洗う洗濯では汚れが落ちない、不潔だ、という感覚は、たまにしか洗濯しない場合は必要である。ヨーロッパの人々の洗濯は、古くは棒でたたき、ブラシでこすり、煮沸する

ものだった。そこでは衣類に対して力を加えることによって、繊維の中にしみこんでいる汚れを剥ぎ落とす。これに対して毎日のように洗濯している日本では、殺菌して剥ぎ落とさなければならぬほどの汚れはほとんどない。私たちの洗濯は、洗濯そのものが「すすぐ」という行為で、ヨーロッパの人から見れば、本来の「洗う」過程をとびこえているものだろう。汚れは流れる水とともに去っていく。かくして、桃太郎のおばあさんは毎日川に行ったのである。

■掃除にあらわれた違い

さて、もう一つの清潔に関わる家事である掃除も、ヨーロッパと日本では違う。それは汚れに対する姿勢の違いを表わしているようだ。

□ほこりを除くために行う日本の掃除

掃除という日本語は「掃き、除く」という動詞からなる。除かれるのは埃や小さなゴミの類である。掃除は、はたきとほうきと雑巾とバケツで行った。「最近の人ははたきを使わない」といわれるが、はたきは住まいの清潔のために重要な役割を果たしていたのであ

る。埃を取り除くのである。ほうきも床面の埃をはき寄せるために用いた。では雑巾はどうだろうか。雑巾はかたく絞るのを好む。この雑巾は、ほうきだけでは完全にぬぐい去ることのできなかつたほこりを、一時的に固定させるのに一役かっているのである。固定されたほこりは、バケツの水にすぐに放される。



そして、その水は十分もしないうちに庭にまかれることになる。ぞうきんがけも埃を取り除く行為であって、したがって「掃除」を構成するわけである。

このような掃除を専門にする女性を日本語では掃除婦というが、ドイツ語で掃除婦に対

応する語はPutzfrauという。ところが、そのもとなる動詞Putzen「ツェン」は、「こすったり磨いたりする」という意味で、日本語の「掃き除く」とはすいぶん違う。ことばの違いには、掃除そのものの相違が反映している。

□こすって磨くヨーロッパの掃除

ドイツ人の掃除には「こする」過程を欠くことができない。ついにながら掃除機「埃を吸い取るもの」Staubsaugerといって電気掃除機に対してだけ用いられる。日本では埃を吸い取る機能はまさしく掃除のすべてを満たす機能だから「掃除機」という掃除を代表する名称を与えられているが、ドイツでは「埃を吸い取る」ことは掃除の中のごく一部の機能を果たすにすぎない。そこでこの機械は、その機能を名称として与えられているのである。ドイツ語の世界では、埃を除くのが掃除の本義ではなく、掃除という家事を代表するのは「こする」行為なのである。

「こする」行為には「ブラシでこする」行為と「磨いてつやを出す」行為が含まれる。一方が汚れを剥ぎ取るのに対し、他方はつやを与えるために行う。床は年に数回ブラシで

洗って大掃除をする。床や家具、ドアのノブや階段の手すりなどは布で磨きこむ。ワックスをかけるのはその一例である。ワックスというような油脂を与える行為は、本来わが国の家事にはなかつた。日本の雑巾とヨーロッパのこする布とは、その働きがまったく異なる。

日本の雑巾が水に浸すものであるのに対して、ヨーロッパで掃除に使う布は乾いている。それは、こすり磨くためのもので、つねに若干の油分を帯びていて、汚れを封じ込める働きをする。この乾いた雑巾は、いちどの使用で洗うというのではなく、何度も使った後に、十分時間をかけて煮沸に近い温度で洗うのである。

この雑巾の使い方、洗濯について見たのとまったく同様の対照を容易に見いだすことができる。

□汚れに対する行為の違い

掃除に表われている汚れに対する行為の違いは、気候、食べ物、家屋構造、労働など生活のあらゆる側面が複合し、歴史的に形成されてきたのだと考えるべきである。

たとえば、食べ物について見ると、ヨーロ

ップの人々の食生活では、伝統的に油脂を多く摂取する。貧しい生活をしてきたかつての農村の人々は、実は私たちが思っているほど肉を食べたわけではない。雑穀の粥を多く食べていたのである。ただし、ラードをかなり摂取している。一度豚を屠殺すれば、かなりの量の脂身がでる。それを決して無駄にする

ヨーロッパ式掃除
(こすり、磨く)



煮沸したりして取り除かなければならない。その一方で、油をすべて取り除くことなど不可能であるし、その必要もない。油污れを取り除くには、油をもつてするのが最もよい方法である。「磨く」というのはこのことだから磨くことが掃除の重要な部分を占めるのである。

ことなく、すべて食生活に生かしているのである。豚の脂身は、調味料であり、保存食であり、重要な熱量源として、ヨーロッパの食事の味を形成してきたのである。このようにひんぱんに脂身を使う食生活では、油は身近なものである。汚れた油はブラシを使ったり、

ところで、このように油と親しくつきあえるのは、ヨーロッパの乾燥した気候のおかげでもある。日本のように湿度が高ければ、ラードを保存食とすることもむずかしいだろう。日本人はラードの代わりに、ヨーロッパの内陸の人々の手には届かない、米と魚を食べているのである。湿度の高い日本では、毎日お風呂にはいりたくなくなるし、毎日身体を洗っているから、洗濯も簡単にすませることがあたりまえだと考えている。また、衣類の繊維を取り上げてみても、日本の柔らかな綿繊維は、こまめに水ですすぐ生活の中で日常着として定着してきたのであって、これをヨーロッパの洗濯機で洗おうものならひとたまりもない。一方、ヨーロッパのごわごわしたリネンのシャツは、とても水洗いで歯のたつような代物ではない。高温の湯の中でたたいて、さらに

アイロンをかける、という繊維をいためつけるような過程を何度もくぐるうちに、なじんでくるのである。

■おわり

日本人の食生活は変化し、油の摂取量は確実に多くなっている。今日、川ですすぐ洗濯ではもちろん汚れを十分に落とすことはできない。食生活ばかりでなく、生活のあらゆる側面で、ヨーロッパ生まれの道具や考え方が横行しているように見える。それでも、もともと身近で、日常の中に埋没している毎日の家事に見えかくれしている清潔観が、日本とヨーロッパで、なおこのように違っているというのは、たいへん興味深い。

およそ清潔観というのは、人々の営みとともに形成されていく文化の中でも、もっともかわりにくいものの一つではないだろうか。それは、私たちの肌で感じる感覚であって、もっとも身体に近いところにありながら、感覚の域に達し、もはや物質のレベルを越えている。

清潔観は、ときに暴力の契機になるほど過激なものでもある。何年か前に、横浜でホー

ムレスの人に暴力をふるった少年たちの事件があったが、少年たちのいい分は「きたない」からというものだった。最近、大阪の中学校で起きた事件でも、加害者の生徒は同級生を「きたない」と思ったという。思春期の清潔観はときとして異常に肥大する。清潔観もさまざまな形をとりうる。

家を守る女たちの清潔観は、野太くおおかである。それは、ヨーロッパと日本のそれぞれの風土の中で、知らず知らずのうちに、しかし、たくましく受け継がれてきた。それぞれの清潔観が、彼我の家族を守る女たちの毎日の営みを貫いているのである。ヨーロッパで生活していると、知らぬ間に自分の身につけていた日本の清潔観を再認識するときがある。そんなとき私は、台所に立っている母の姿を思い出すのである。

